

網走地方において近年記録された稀少カモ目鳥類

川崎康弘

099-4115 斜里郡斜里町光陽町31-16, 日本野鳥の会オホーツク支部

The records of rare ANSERIFORMES Birds in recent years in Abashiri district.

KAWASAKI Yasuhiro

Okhotsk branch of Wild Bird Society of Japan, 31-16 Koyo-cho, Shari, Hokkaido 099-4115, Japan. marlboro@v003.vaio.ne.jp

はじめに

筆者は、2001年に網走支庁管内における鳥類の確実な記録をまとめ、「網走支庁管内鳥類目録」として報告したが、これには詳細が未発表の貴重な事例も若干含まれていた。また、目録発表後あらたに記録された稀少な種、および特筆すべき観察事例なども徐々に蓄積されてきており、目録の全面的な改定より先に、これらについてなるべく早期に詳細を明らかにする必要があると思われた。しかしながら、蓄積された情報全てを一度の報告でまとめるにはいささか無理があり、いくつかのグループに分け、それぞれ個別に報告していく方が妥当と考えられた。この考えに基づき、今回は対象をカモ目鳥類に絞った上で詳細をまとめ、報告する。

基本的にカモ目鳥類を対象を限った調査は行っておらず、本報告で採り上げる観察記録は全て一般的な野鳥観察（バードウォッチング）によって得られたものである。ただし、観察に際してデータは可能な限り詳細に野帳へ書き留め、必要に応じ、デジタルカメラ等を用いて画像を残すよう留意した。観察には主に10×の双眼鏡、および20-60×のフィールドスコープを使用した。

まとめるにあたっては、日本鳥学会（2000）に従い分類順に、1種（もしくは亜種等）毎に項目を設け、詳細な観察状況や考察等について述べる。観察状況のうち、観察地を示す緯度経度は世界測

地系に基づくものである。また、前述の「網走支庁管内鳥類目録」に収録済みの記録については、それぞれの項の文末に「目録収録」と記す。記録の詳細の内、特に観察者名の記載がないものについては筆者によるものである。私信による観察例の記述にあたっては、必要に応じて聞き取り調査を重ね、可能な限り詳細な部分まで把握するよう努めた。

なお、本報告で用いる「網走地方」とは、網走市・常呂町・佐呂間町・女満別町・東藻琴村・斜里町・小清水町・清里町・美幌町・津別町の、1市8町1村（2004年4月現在）からなる地域の総称であり、これは一般的な気象予報に用いられる区分と同様である。この「網走地方」と「網走支庁管内」を区別しやすくするため、以下の本文中、後者を特に「オホーツク圏」と呼ぶこととする。

稀少カモ目鳥類の観察記録

シジュウカラガンの1亜種ヒメシジュウカラガン
Branta canadensis minima

2002年12月3日、網走川が網走湖に注ぐインレット付近（43°55'30"N, 144°09'44"E）において、湖面に降りて休息している200羽ほどのヒシクイ（亜種ヒシクイ *Anser fabalis serrirostris*）群中に混在している1羽が、筆者家人である川崎里実により観察された。この時にはわずかな間観察したところで群れが飛散してしまったため、亜種の特定はで

きなかった。

翌4日、発見した地点より約2.5km南西に位置する、女満別町住吉の刈り取り後の水田(43°55'04"N, 144°07'40"E)にて、189羽のヒシクイと6羽のマガンからなる群れに混在し、採食および休息している姿が観察・撮影された。この際、ヒシクイ(亜種ヒシクイ)と比較して二回りほど小型であること、頸は短く、頸の基部付近に白色の帯がないこと、嘴が小さい、といった本亜種に見られる外見上の特徴(Madge & Burn 1988; 真木・大西 2000)が認められたため、亜種ヒメシジュウカラガンと確認された。同地周辺では5日まで観察され、6日以降の記録はなかったが、翌春の2003年3月23日に小清水町字止別の牧草地(43°55'16"N, 144°30'05"E)において、275羽のヒシクイ群中に混在している姿を発見された。翌24日にも同地において観察され(斎藤喜一郎・嶋崎太郎, 私信)、その後一旦記録が途絶えたが、4月7日に1.5kmほど南西に位置した畑地(43°54'41"N, 144°29'44"E)にいたところを再確認された。

標識等による確実な個体識別が叶わないため、これらが全て同一の個体であると断言できないが、全ての観察時において同様に亜種ヒシクイの群中に見られたこと、また、本種の日本における渡来数や、それに伴う観察頻度等を考えた際、同一個体とすることに何ら無理は無いものと思われる。

本亜種は、北海道では1980年以降、美瑛市において記録されているが(藤巻 2000)、オホーツク圏においては報告例がなく(川崎 2001)、初めての記録と思われる。

ハクガン *Anser caerulescens*

1999年11月7日、小清水町字止別(43°54'37"N, 144°32'17"E)において、飛翔するヒシクイ約80羽の群中に混在する本種1羽が発見された。ほぼ一様に暗色に見えるヒシクイの群中に、1羽だけ白い本種が混在していたことから、非常によく目立っていた。追跡したところ、この群れは小清水町字止別の畑地(43°54'15"N, 144°32'36"E)にまとまって降り、採食をはじめ、本件個体も他のヒシクイと同様に採食をしていた。筆者はその後周辺において調査をする機会を得ず、結果として本件個体を再確認するに至らなかったため、その後の動向については不明である。

なお、オホーツク圏における本種の記録はこれまでに2例あり(川崎 2001)、本件が3例目である。
[目録収録]

マガモ *Anas platyrhynchos* と カルガモ *A. poecilorhyncha* の交雑個体

2003年3月24日、斜里川河口付近(43°55'10"N, 144°39'20"E)において、流氷上にて休息する、主としてマガモとカルガモからなるカモ類の群中に混在する交雑個体1羽が観察された。この個体には、以下の特徴が見受けられた。

- a) マガモ大の大きさ。
- b) 頭頂から後頸にかけて、マガモの雄的な光沢のある緑色。
- c) 喉から頬にかけては淡褐色で、黒っぽい過眼線が非常に濃く、よく目立つ。
- d) 上嘴はマガモ雄のパターンに似ているものの、全体に黒みを帯びてやや汚れた印象。
- e) 下嘴はカルガモ的なパターン。
- f) 茶色の胸、上・下尾筒、尾はマガモの雄的。
- g) 雨覆や肩羽、脇から腹にかけては濃褐色で目立った模様がなく、カルガモ的。
- h) 足は赤橙色。

このように、マガモ・カルガモ両種の特徴を併せ持つことから、この個体はマガモとカルガモとの間に生まれた交雑個体と考えられた。翌々日の26日にも同一個体が同地において観察された。この時、マガモとカルガモはそれぞれの種毎に分かれて行動していたが、本個体はカルガモの群中に混在して行動を共にしていた。このことから、本個体は雄のマガモと雌のカルガモとの交雑により生まれた個体であり、雌親がカルガモであることからカルガモの個体群の中で生活しているものと推測された。なお、本個体は胸や喉の一部に重油と思われる黒褐色の液体が付着しており、観察時には特に衰弱した様子は見受けられなかったものの、ついに再度姿を見ることはなかった。

コガモ *Anas crecca* の亜種間交雑個体

日本で普通に観察されるコガモは亜種コガモ *A.c. crecca* であるが、北米産亜種アメリカコガモ *A.c. carolinensis* も少数渡来し(真木・大西 2000)、網走地方でも度々観察される(川崎 1997)。

両亜種の雌や幼鳥、またエクリプス羽の雄では

識別が困難であるが、雄成鳥では外見上の明確な差異がある。亜種コガモの雄成鳥は肩羽の外縁が白く、静止時には体の中央に白い水平な線となって出るのが特徴であるが、亜種アメリカコガモの雄成鳥ではこの体中央の白線が見られず、代わって側胸部に体に対して垂直の白線が出る点などで異なっている (Madge & Burn 1988; 真木・大西 2000)。このような両亜種の特徴を併せ持つ中間個体、すなわち、肩羽の白線と側胸の白線の両方を併せ持つ個体も稀に見られ、両亜種の交雑個体と考えられる (桐原ら 2000)。

2001年5月6日には、瀧沸湖の東にある平和橋付近 (43°55'25"N, 144°25'38"E) において、このような亜種間交雑個体と思われる特徴を備えた雄1羽が観察された。この個体は亜種コガモ100±羽の群中にいて、雌1羽と常に行動を共にしており、つがいである可能性が高いように見受けられた。雌の亜種については前述の通り識別が困難であるが、亜種コガモと考えて差し支えないと思われる。

トモエガモ *Anas formosa*

本種はユーラシア大陸の高緯度地方東部のシベリア・カムチャツカ半島に繁殖分布し、中国東部や朝鮮半島・日本で越冬する種である (Madge & Burn 1988; 中村・中村 1995; 桐原ら 2000)。しかしながら、かつては非常に多く生息していたシベリアでも現在では分布域全体で珍しい種になってしまったとされ (クレチマル 1996)、また日本国内でも渡来数が減少しており、かつて1万羽以上渡来していた石川県片野鴨池でも近年は多くて1,000羽程度しか観察されなくなっているとされる (山本・大畑 2000)。

日本では主に本州以南の日本海側の地域に渡来し (桐原ら 2000; 真木・大西 2000)、北海道では稀、もしくは数の少ない冬鳥とされ記録も多くないが (藤巻 2000; 河井ら 2003)、中でもオホーツク圏では記録が少なく、これまでに確実な記録として報告されているものは紋別市コムケ湖と斜里川河口の2例のみと考えられる (川崎 2001)。以下に、新たにオホーツク圏内において確認された例について、詳細を記す。

事例 1: 2001年5月6日、瀧沸湖の東にある平和橋付近 (43°55'25"N, 144°25'38"E) において、コガモ約100羽の群中に混在する雄1羽が確認された。

事例 2: 2003年3月29日、常呂町栄浦のライトコロ川に架かる栄浦橋付近 (44°07'48"N, 143°59'09"E) において、雌雄各1羽が観察された (田中史雄, 私信)。情報を受けた筆者も翌々日の31日に現地を訪ねたが、この時には雄1羽を確認するに留まった。この時に周辺で観察されたカモ類は、マガモ、オナガガモ *A. acuta*、ヒドリガモ *A. penelope*、スズガモ *Aythya marila*、キンクロハジロ *Aythya fuligula*、ホオジロガモ *Bucephala clangula*、カワアイサ *Mergus merganser* であり、コガモは確認されなかった。

事例 3: 2003年4月9日、斜里漁港内 (43°55'12"N, 144°39'51"E) において、オナガガモとヒドリガモからなるカモ類の混群中に雌2羽の姿が見られた。この日は、荒天のため一時岸から離れていた流水が再接岸し、周辺の斜里川河口部や海上にいたカモ類が行き場を失い、港内に集結している状況であった。

事例 4: 2003年5月9日、藻琴湖 (43°56'53"N, 144°18'48"E) において、コガモ約200羽の群中に混在し、砂州上で採食する雌1羽が観察された (嶋崎太郎, 私信)。

以上の4例が、筆者が知り得た限りの確実な記録である。

前述の通り、これ以前には確実な記録がわずかに2例あるだけであったが、ここ数年でその倍の記録がある。しかしながら、このことだけによって本種の渡来数が増加しているとは言い切れない。なぜなら、日本野鳥の会小清水支部 (1987) や、斉藤 (1996) に収録されている表中に本種の記載があるなど、[網走支庁管内鳥類目録] に挙げた2例以外にもいくつかの観察事例があると考えられるためである。過去の渡来状況が正しく把握できない以上、安易に比較するには危険が伴うが、筆者が先輩諸氏から聞き及んだ限りでは、過去と現在の間にもそれほど大きな渡来状況の変化は生じていないように思われる。近年は観察者が増え、またフィールドスコープ等の光学機器の性能も相当に上がっていることから、目の行き届く範囲が増し、結果として記録が増加したのではないかとと思われる。

なお、本種は雄の生殖羽であれば特徴的な外見であるため識別は比較的易しいが、雌や幼鳥、あるいは雄エクリプス羽の個体はコガモなどの他の

マガモ属カモ類とよく似ており、こうした個体の多くが誤って記録されてしまう可能性がある。分かりやすい雄だけに注意を払うのではなく、雌や幼鳥といった他のカモ類に類似するものもしっかりと見いだしていくことで、初めて正確な渡来状況が分かるはずである。カモ類の調査研究を行うにあたっては、この点を心に留めた上で進めていくことが肝要と思われる。

アメリカヒドリ *Anas americana*

筆者は、かつて本種を「(網走市～斜里町においては)数少ない旅鳥」としたが(川崎 1997)、1998年以降は春・秋の渡来時期(特に秋)に十分な調査を行えない状況が続いており、ここ数年の渡来状況を把握しているとは言い難い。それほど長い時間が経過しているわけではないため、大きな変化が生じているとは考えにくい。本種の北海道における移動型を稀とする見解が近年もあるため(藤巻 2000; 北海道新聞社 2002)、今後あらためて網走地方での渡来状況について調査を行う必要があるように思われる。このことを念頭に置いた上で、近年の観察事例を以下に挙げる。

事例 1: 2000年4月7日、斜里川河口(43°54'58"N, 144°39'34"E)において、ヒドリガモ雄1羽・雌5羽と共に河口部の砂州上で休息する雌1羽が観察された。この個体は頭部の灰色みが強く、胸や脇の赤褐色とのコントラストが際だっており、一見して本種の雌である可能性が高いと思われた。注意深く観察を続けていたところ羽づくろいを始め、最後に翼を広げて伸びをした。その際、腋羽がきれいな白色であることを確認し、桐原ら(2000)に基づき、本種の雌と考える問題ないと思われた。この個体は翌8日にも同地横の草地(43°54'56"N, 144°39'25"E)で採食している姿が確認された。[目録収録]

事例 2: 2002年12月1日、濤沸湖の東に位置する平和橋付近(43°55'14"N, 144°26'04"E)において、ヒドリガモ約100羽の群中に混在している雄1羽が観察された(斎藤喜一郎、私信)。

事例 3: 2004年3月31日、濤沸湖の東に位置する平和橋付近(43°55'21"N, 144°25'56"E)において雄1羽が観察された。約530羽のヒドリガモ群中に混在しており、ヒドリガモの雌1羽と行動を共にしていたが、つがいであるかどうかは確認できな

った。

アラナミキンクロ *Melanitta perspicillata*

2000年2月27日、網走川河口(44°01'26"N, 144°16'47"E)において雄幼鳥1羽が観察された。当時、周辺の海域は全て厚い流水に覆われ、港内もそのほとんどが氷結し、網走川河口の一带にのみわずかな開水面が見られる状況であり、そこにホオジロガモやピロードキンクロ *M. fusca* などのカモ類が100羽以上集結していた。本件個体はピロードキンクロの群中に混在しているところを発見された。網走川河口では1995年2月23日～3月1日にも本種の雄成鳥が1羽観察されているが(川崎 1997)、この時とほぼ同様の状況であった。

本件個体はピロードキンクロ大で次列風切に白色部がなく、頭頂が平ら、嘴は鮮やかさに欠ける橙黄色で基部に黒斑があるといった特徴が認められたため、本種の雄個体と判断された。しかしながら、雄成鳥に見られる特徴、すなわち全身が黒く、額と後頭に白斑があり、虹彩が白といった点は認められず、代わって、上面・下面ともに黒と褐色の斑模様で、後頭がやや白っぽく見える程度で額の白色部がなく、虹彩は鈍い黄色であったため、Madge & Burn(1988)やOgilvie & Young(1998)に基づき、換羽中の雄幼鳥(第1回冬羽)と同定された。

この個体はその後、ピロードキンクロの群れと行動を常に共にし、流水が動いて周辺海域が広く開けたあとは網走市海岸町の沿岸部海上(44°01'N, 144°16'E)へ移動し、以降3月28日までの1ヶ月間、周辺において断続的に観察された。

なお、この個体の写真は斎藤喜一郎氏によって撮影され、河井ら(2003)に掲載されている。[目録収録]

謝辞

本報告をまとめるにあたり、貴重な観察記録をお寄せいただき、また度重なる聞き取り調査にも快く応じていただいた斎藤喜一郎、嶋崎太郎、田中史雄の各氏、また、本報告を執筆する機会を下さり、数々の助言をいただいた知床博物館の中川元氏、以上の方々に深く感謝の意を表する。

引用文献

- 藤巻裕蔵. 2000. 北海道鳥類目録 改訂2版. 83pp.
帯広畜産大学野生動物管理学研究室, 帯広市.
北海道新聞社(編). 2002. 北海道の野鳥. 372pp.
北海道新聞社, 札幌.
- 河井大輔・川崎康弘・島田明英・諸橋 淳. 2003.
北海道野鳥図鑑. 400pp. 亜璃西社, 札幌.
- 川崎康弘. 1997. 網走市・小清水町・斜里町にお
けるオホーツク海沿岸部周辺の鳥類. 知床博
物館研究報告18: 19-34.
- 川崎康弘. 2001. 網走支庁管内鳥類目録ー北海
道・オホーツク圏で確認された鳥類ー. 知床
博物館研究報告22: 55-68.
- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸. 2000. 日本の鳥
550<水辺の鳥>. 352pp. 文一総合出版, 東
京.
- クレチマル A V. 1996. 北シベリア鳥類図鑑.
128pp. 文一総合出版, 東京.
- Madge S & Burn H. 1988. Waterfowl. 298pp.
Christopher Helm, London.
- 真木広造・大西敏一. 2000. 日本の野鳥590.656pp.
平凡社, 東京.
- 中村登流・中村雅彦. 1995. 原色日本野鳥生態図
鑑<水鳥編>. 304pp. 保育社, 大阪.
- 日本鳥学会. 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版.
346pp. 日本鳥学会, 帯広市.
- 日本野鳥の会小清水支部(編). 1987. 小清水の野
鳥. 192pp. 小清水町教育委員会, 小清水町.
- Ogilvie M & Young S. 1998. Photographic Handbook
of the Wildfowl of the World. 175pp. New
Holland, London.
- 斉藤喜一郎. 1996. 網走の野鳥277.28pp. 東京農
業大学生物産業学部オホーツク野生動物研究
会, 網走市.
- 山本浩伸・大畑孝二. 2000. 石川県片野鴨池にお
けるトモエガモの個体数変動と採食場所への
飛び立ち行動. Strix18: 55-63.

川崎康弘. 網走地方において近年記録された稀少カモ目鳥類. KAWASAKI Yasuhiro. The Records
of Rare ANSERIFORMES Birds in Recent Years in Abashiri District. pp.15-19.



口絵写真1. シジュウカラガンの一亜種ヒメシジュウカラガン *Branta canadensis minima*. 2003年4月7日, 小清水町止別.



口絵写真2. 同上.



口絵写真3. トモエガモ *Anas formosa*. 2003年4月9日, 斜里漁港内.